第30回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演
東京公演ニュース
未来へ
国立劇場の夏
最高級の舞台を堪能あれ！
錦城高校・本郷高校新聞
共同編集・発行

今までの成果をこの舞台で

東京公演、いよいよ本番

今日から待ちに待った第30回全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演が行われる。そこで、リハーサルの様子と舞台を支える裏方や出演校に、本番までの決意を取材した。（錦城高校・本郷高校共同取材）

本番のプログラム

≪８月２４日(土)・１日目≫

１２：３０　開場
１３：００　国際高校（オープニング公演）
１３：０５　始めの挨拶
１３：２２　府中高校（オープニング公演）
１４：０５　創価高校（日本音楽）
１４：１５　橋本高校（日本音楽）
１４：２５　由布高校（郷土芸能）
１４：４０　南多摩中等教育学校（郷土芸能）
１４：５５　幕間インタビュー
１５：１５　帯広北高校（演劇）
１６：００　幕間インタビュー
１６：１８　屋久島高校（演劇）
１７：１８　幕間インタビュー
１７：２１　終了

≪８月２５日(日)・２日目≫

１２：３０　開場
１３：００　始めの挨拶
１３：０７　東京都日本音楽部門合同チーム
１３：１７　佐賀西高校（合唱）
１３：５０　星野高校（日本音楽）
１４：００　関西創価高校（日本音楽）
１４：１０　必由館高校（郷土芸能）
１４：２０　八重山農林高校（郷土芸能）
１４：３５　幕間インタビュー
１４：５５　深川高校（演劇）
１５：５５　幕間インタビュー
１６：１３　ふたば未来学園高校（演劇）
１７：１３　幕間インタビュー
１７：３１　逗子開成高校（演劇）
１８：３１　幕間インタビュー
１８：３４　終了

開園１時間前にも関わらず劇場の外でできる長蛇の列

創価高校〈日本音楽〉

日本音楽部門で箏曲『大河』を演奏する創価高校箏曲部。水の滴り落ちる響き、せせらぎの音、砕ける水音から始まり、源流から河口までの大きな川の流れを描いている。

リハーサルでは始めに位置の調整や箏の調律の確認を行う。その後、礼のタイミングを確認して通し練習が始まる。指導の先生から「ゆったりとしていいよ」と声をかけられ、場が和む一幕も見られた。

『大河』の出だしは全員の迫力のある和音から始まる。様々な川の流れを、メリハリのある美しい音色で表現していく。各パート指先まで一糸乱れぬ動作で演奏した。

最後に、位置の微調整と緞帳のタイミング確認をしてリハーサルは終わりとなった。

十七弦の響きがゆったりとした大河の下流の流れを見事に表現している。音色だけでなく、演奏する姿にも注目だ。

創価高校の歌うような演奏が会場に響く

橋本高校〈日本音楽〉

箏を演奏する和歌山県立橋本高校の演奏曲『絃歌』は「箏をひき、詩をうたう」という意味。箏の独奏に合わせて、他の箏が演奏する形式となっている。5パートに分かれており、静かな始まりから徐々に盛り上がりを見せながら、終盤で力強く華やかな演奏が展開される構成だ。美しい調弦と爪音まで気を遣った所作が魅力的であった。

礼の練習や動き、座る位置の確認の他に、下手側の音響を上げてもらうなどの調整が入る場面も見られた。

通しの演奏後、総合演出からきちんと前を向いてから礼をするよう指摘されると、１度で息のそろった礼が返されていた。

本番は各パートが織りなす一体感ある箏の音色に注目だ。

独特の世界観で観客を引き込む

南多摩中等教育学校〈郷土芸能〉

南多摩中等教育学校のリハーサルは、太鼓の位置調整から始まった。その後、演目である『八多化の響き』を演奏する。太鼓の音の強弱が滑らかに入れ替わり、演奏者は躍動感のある一挙手一投足で迫力があった。

演奏後の礼では最初、顔をあげるタイミングが合っていなかった。しかし、舞台監督の指摘を受けて即座に対応し、動きが揃った礼をみせる。他に変更が入ったのは、１番後ろの太鼓の高さと最初に歌を歌う人の登場の仕方。変更を受けて、２回目の演奏ではより整然とした流れを見せ、リハーサルを終えた。

本番では今までで１番の演奏を見せてくれることだろう。

躍動感のある動きで目を惹きつける

舞台全体を大きく使って迫力ある舞を披露する赤鬼

由布高校〈郷土芸能〉

郷土芸能部門の由布高校が披露する演目は、古事記の中にある物語を題材とした庄内神楽『天孫降臨』。

入念に行われたリハーサルでは、踊り子の立ち位置や楽器の音量などの確認作業が行われ、その後２度の通し練習。「ありがとうございました！」と息の揃った部員たちのあいさつでリハーサルを終えた。

演目では派手な衣装を身にまとった神々が舞台の上を縦横無尽に踊り回る。最大の見所は花道で舞踊をする場面だ。間近で見ることができる演者たちの舞踊は圧巻の一言である。

独特の世界観へ観客を引き込む『天孫降臨』。彼らの演技にぜひ期待してほしい。

帯広北高校〈演劇〉

『放課後談話』は帯広北高校演劇部の実話をもとに書かれた、部員不足に悩む演劇の話だ。今回の公演では役者とスタッフ二人ずつの計四人で演じる。

リハーサルは最初照明や音響の確認、垂れ幕の調整、緞帳のタイミング合わせなどが一時間以上かけて入念に行われた。

その後の通し練習では二人の役者の会話が続く。物語はごく普通の雑談で進んでいくが、考えさせる内容と音響を効果的に使ったことで、観客を２人の世界にどんどん引き込んでいく。動きこそ少ないが、２人の世界に見入ってしまう演技に注目したい。

放課後の２人の会話で物語が進む

屋久島高校〈演劇〉

演劇『ジョン・デンバーへの手紙』を演じる鹿児島県立屋久島高校。リハーサルでは舞台セットや役者の立ち位置、映像、照明、音響などの念入りな確認が行われた。総合演出が役者に「目線は提灯の上あたりが良い」とアドバイスする場面も見られた。

この作品は、森林伐採に反対する青年と島民を描いたもの。演劇部の顧問が、屋久島の自然を守るために立ち上がる人々の様子を脚本に書き起こした。役者らは、観る者を惹きこむような圧巻のパフォーマンスを繰り広げていた。

また、演劇では珍しいスクリーンを使った演出も。背後からスクリーンの光を浴びた役者のシルエットが浮かび上がる、美しい表現方法にも注目だ。

本番では屋久島の歴史と自然に触れながら、細部までこだわった迫力ある演劇をご覧あれ。

観る者を惹きこむ圧巻のパフォーマンス

呈茶でいこいのひと時を

公演本番の２４日・２５日では、公演の合間の時間を利用して２階の呈茶場にて呈茶が行われる。呈茶を行うのは、都内２０校の茶道と関わりのある高校生、約５０人。都立小石川高校茶道部部長の興石真結子さん(２年)は「全国から来た優秀な高校にふさわしいおもてなしをしたいです」と意気込みを語る。

「本番は、迅速ながらも丁寧に対応したい」

当日は約１０分間の休憩の中で３０人ほどの来場者におもてなしをするという。都立深沢高校茶道部部長の小川弘之くん(２年)は「時間が少ない中でお作法や道具にを大切にします」と話し、都立富士高校茶道部部長の藤中希美さん(２年)は「短い休憩の中でお客さんが急いでいる中、迅速な対応で憩いのひと時を過ごしてほしいです」と微笑んだ。（錦城高校・大石）

最上級の舞台を司会から

司会は、東京都立晴海総合高校放送部の力丸愛実さん(３年)、滝澤龍輝くん(３年)、廣瀬晴希くん(３年)、大岩愛海さん(２年)が務める。

４人が所属する放送部はまだ設立したばかりの部活で、国立劇場で司会の役を担うのも今年が初めてだ。

リハーサルでは始めの言葉を重点的に、話す速さや立ち位置、目線を８の字に動かしながら話すことを確認。４人は身振り手振りを交えながら、言葉ひとつひとつの細かい部分まで意識して練習をしていた。

「環境が違うから新鮮な気持ちで臨める」

リハーサルを振り返ると、普段と環境が違い話すのが難しかったと４人は口を揃える。舞台特有の声の出し方やマイクの持ち方があり、普段とは違いがあるそうだ。しかし廣瀬くんは「普段と環境が違うからこそ、新鮮な気持ちで楽しく仕事に臨むことができます」と話す。

１日目のメイン司会に選ばれた滝澤くんは「大きな舞台で話すことがあまりないので、リハーサルでは緊張して途中でつっかえてしまいました。お客さんがいてこその舞台なので、本番では落ち着いて分かりやすい説明になるよう取り組みたいです」と意気込んだ。（錦城高校・菅原）

「最高の舞台を届けたい」

国立劇場リハーサル１日目

楽屋から届ける各校の思い

日本音楽 創価高校

東京都小平市にある創価高校の箏曲部は、全国高等学校総合文化祭に１５回出場し、国立劇場での優秀校東京公演も今年で１１回目になる実力校だ。今回演奏する曲は『大河』。「『創価高校の曲』だという誇りと、先輩達から受け継いできたという責任がある」と、部長の佐々木優奈さん（３年）と技術部長の力諒子さん（３年）は語る。

笑顔で箏への熱い気持ちを語る２人

箏を始めたのは２人とも高校に入学してからで、仮入部に行った時に見た先輩の演奏が入部の決め手となったそうだ。

練習は週３、４回ほど。箏の先生に習うのではなく、技術部長を中心に先輩から受け継いだ演奏技術を練習して、全員が納得のいく演奏を作り出していくことを目標にしている。さらに、演奏技術のみを追求するのではなく人間性も完成させることを目指しているそうだ。

リハーサルを終えた感想を尋ねると、佐々木さんは「大会の時は２５人までしか舞台に立てなかったので、今回は３６人の部員全員で演奏することができて嬉しい」と笑顔を見せた。力さんは「自分は１年生の時にこの舞台で演奏したことで成長できた。後輩たちもこの経験を来年以降の糧にしてくれれば」と話す。「この舞台は、部員全員で演奏できる最後の舞台。私たち一人一人が大河の一滴のようになり、さらに観客の皆さんも巻き込んで大きな『大河』を作っていけるような演奏を目指したい」と２人は意気込みを語った。（本郷高校・阿部）

日本音楽 橋本高校

和歌山県の県立橋本高校の邦楽部は、肥後一郎作『絃歌』を１年生から３年生までの部員が５つのパートに分かれて演奏する。

邦楽部部長の西本爽帆さん（２年）によると、複数の箏の音が綺麗に１つの音にまとまって聞こえるよう、気を配って演奏しているという。「歌詞のない『絃歌』という曲をどのように表現していくかということにも気を付けました。演奏の技術面は練習することで上達しますが、表現面をどのように上達させていくかということが難しかったです」と語った。

木村眞子さん（３年）は「自分は不器用なので、細部までしっかり意識をして、丁寧に弾くことに苦労しました」と話す。同じく３年生の森本実里さんは、『絃歌』は他の曲よりパート分けが多いため、全てのパートを１つに合わせることに苦労したそうだ。西本さんは「舞台が練習時と違って広いので、自分たちの演奏を聞き取って音を揃えるのが大変でした」とリハーサルを回想した。

息のそろった演奏を目指して練習しました

本番に向けて、森本さんは「３年生の自分にとって、今回の舞台は箏を演奏してきた６年間の集大成なので、後悔の無いように演奏したいです」と意気込んだ。木村さんも「これが最後の舞台。憧れの場所だったので最後の一音まで楽しみたいです」と笑顔を見せる。部長の西本さんは、最後に今後の目標を真剣な表情で語った。「来年の全国大会でも頑張って、またこの舞台に立ちたいです」。（本郷高校・草間）

郷土芸能 由布高校

家族や地元の人へ感謝の気持ちを込めて舞い踊ります

大分県立由布高等学校、郷土芸能部の部長の園田唯我くん（３年）は「僕たちが舞う神楽で感謝の気持ちを伝えたいです」と語る。大分県で盛んな郷土芸能の神楽は庄内神楽と呼ばれているそうだ。県内では年に一度神楽祭りが行われ、幼い子供からお年寄りまで、幅広い世代を対象とする庄内神楽の団体が参加するという。また、毎週２回程度、公民館や老人ホームなどで舞を発表する機会があり「日々の多忙な公演スケジュールの積み重ねが、今回の東京公演出場に繋がったのだと思います」と園田くんは分析した。

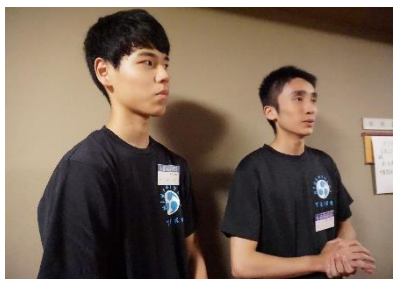
より良い神楽の舞を目指して、日々部員同士でどのように演じるのか話し合いを重ねたという由布高校、郷土芸能部。神楽を演じる際には３時間舞い続けることもあり、多くの体力を必要とするという。力強く舞い続けるための体力をつけるための秘訣は、演技中に太鼓のリズムと舞っている人物でタイミングを合わせることがポイントであるそうだ。「神楽の良さは、全員で舞台を作り上げるところ」と園田くんは熱弁。「舞っている姿が楽しそうに観客に伝わるように舞いたいと思います」と語った。

最後に園田くんは「郷土芸能の全国の代表として選ばれたという自覚を持って本番に臨みたいです。神楽の良さである迫力を観客に伝えるため、全力で踊りつくします」と意気込んだ。（錦城高校・山崎）

郷土芸能 南多摩中等教育学校

東京都立南多摩中等教育学校の太鼓部は、八丈太鼓による「八多化の響き」を演奏。曲名に含まれる「八多化」とは、八丈を意味する。部長の谷口大地くん（３年）と石崎龍くん（２年）によると、八丈太鼓とは東京都の八丈島に伝わる伝統的な太鼓のこと。本来は個人で即興で打つ「個人打ち」や太鼓節だが、今回はそれをベースにしたうえで、大人数で打つ「揃い打ち」にアレンジしたものを加えたそう。

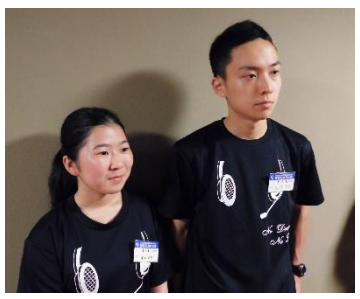
谷口くんによると、今年で創部９年になる太鼓部は「感謝・思いやり・素直さ」の３セットと「時間の管理・物の管理・心の管理・体の管理」の４つの管理をモットーに週５日活動し、日々技術はもちろん、人間力も向上させている。毎年夏に八丈島に合宿に行く伝統があり、自然を感じながら演奏する。今回の演奏では島で触れた風、海、波などの大自然のイメージを太鼓にのせて演奏することを目標としているそうだ。



合宿で感じたものを太鼓にのせてお客さんと共有したい

谷口くんは、演奏の中で注目してほしい点について「太鼓だけでなく、声や気持ちも演奏の１つだと思っているので、演奏をきいて僕たちの盛り上がりや哀愁の気持ちを感じ取って欲しいです」という。最後に本番に向けて２人は「八丈島には合宿に行ってきたばかりで、そこで感じたものはたくさんありました。太鼓にのせた僕たちの気持ちをお客さんと共有して、演奏を楽しみたいです」と話した。（錦城高校・菅原）

演劇 屋久島高校



地域のみんなで作り上げた演劇、最後の舞台も楽しんで演じたい

鹿児島県の屋久島高校演劇部は総勢１８名で毎日活動している。取材に応じてくれたのは、部長の濱田凪沙さん（３年）と主役を演じる山下万希くん（３年）の２人。今回演じるのは「ジョン・デンバーへの手紙」という、屋久島高校で起きた実話を基にして演劇部の顧問が脚本を手がけた作品だ。

屋久島高校は屋久島にある唯一の高校。演劇部員同士が毎日顔を合わせているため生徒間の距離が近く、何でも言い合える関係が築けているそう。また、濱田さんは「先生と生徒も距離が近いのが部の魅力だと思います」と語り、部全体で上下関係なく高め合える雰囲気が特徴だと言った。

練習を始めたのは去年の９月。実際に作品のモデルとされている地域の方に直接話を伺い、感情のズレを補正することができたそうだ。山下くんは「役の個性や人柄などをリアルに表現するのに地域の方との話し合いが役立ちました」と話す。浜田さんは「屋久島高校だけでなく地域で作り上げた作品だと思います」と語った。

本番に向けては「自分たちが楽しんで演技をし、お客さんに何か１つ伝えられるようにしたいです」と濱田さん。主役を務める山下くんは「来てくれる協力者の方々に感謝の気持ちを込めて演じたいです」と決意を話した。（錦城高校・中村）

演劇 帯広北高校

帯広北高校演劇部の部員は、全員でわずか４人しかいない。２人が舞台で演じ、あとの２人は照明や音響を担当している。国立劇場に出た感想を「地域のホールとは、劇場の大きさも人の多さもスケールが違います」と口をそろえて話すのは、劇に出演している賀来海穏くん（１年）と松下結翔くん（２年）。この部は３年生の引退後、部員が１人だけになってしまい、存続の危機に陥ったという。今回上演する『放課後談話』は、その実話を基に製作されている会話劇だ。演劇部に１人残った部員が、大会に出るためにもう１人部員が必要になり、何気ない会話をしながら友人を演劇部に誘う、という内容である。

上演する際に気を付けたことは、劇らしさをなくし、あくまで普段の会話を再現すること。リアリティのある言い回しや、大声を出している感じを無くすような台詞の言い方などを追求した。「評価よりも、お客さんをどう笑わせるかを大切にしています」と松下くん。「笑ってくれてなんぼですね」と、賀来くんも語る。

部員が少ないなりに良いものが作れていると思います

国立劇場での公演は初めてだという２人。賀来くんは、初舞台への意気込みを「緊張しますが、自分のやれることを楽しんでやっていきます」と話す。松下くんも「できるだけ緊張せずに、お客さんを楽しませるだけでなく、あわよくば自分も楽しみたいです」と笑顔を見せた。（錦城高校・濱田）